

## ➤ 二葉亭四迷がエスペラントを売り出す

第1回世界エスペラント大会が開かれ、ヨーロッパの知識人に迎えられたエスペラントですが、日本にはどのように伝えられたのでしょうか。いろいろと説があったようですが現在は、二葉亭四迷(本名、長谷川辰之助)が最初に日本に伝えたと言われています。

二葉亭四迷は1887(明治20)年、言文一致体で書いた小説『浮雲』で有名です。しかし父から、文学などをやるような三文文士は“くたばってしまえ!”と言われ、筆名をこのようにしたと言っています。もともとロシア語を学んでいてウラジオストックにいた1902年ごろ、当地のエスペラントの学習会に参加し、フォードル・A.ポストニコフというロシア人からエスペラントを学びました。このポストニコフは、ペテルブルグでザメンホフからエスペラントを教わりました。

翌年、二葉亭が日本に帰国したところ、ポストニコフが後を追うように東京の二葉亭を訪ね、お金は出すからエスペラントの教科書を翻訳して出版してくれと依頼しました。そうして二葉亭は、ザメンホフ博士著『世界語』、続いて『世界語読本』を1906年、東京の彩雲閣から出版します。

この二つの本が予想外に売れ、ベストセラーになりました。朝日新聞がその年の末、「今年は浪花節とエスペラントが大流行」と書いたほど、エスペラントはインテリなどに大きな影響を与え、浸透しました。

またほぼ同時に、岡山にいた第六高等学校のG.エドワード・ガントレットという英語教師がエスペラントの通信教育を始めました。ガントレットは、金沢にいた宣教師であるD.R.マッケンジーから入門書を借りてエスペラントを学びました。およそ700人の日本人がこの通信教育で学んだようです。ガントレットの妻になった恒子の弟が作曲家で有名な山田耕筰で、彼もエスペラントを学びました。

また一方、留学中のドイツでエスペラントを学んだ丘浅次郎という生物学者もいます。

## ➤ エスペラントに魅せられた柳田国男

国際共通語としてのエスペラントの魅力に惹きつけられた日本人は多くいますが、ここでは近代日本の知識人としてユニークな何人かを挙げておきましょう。

そのひとりが柳田国男です。柳田は日本全国各地を歩き、日本人とはどういう人たちなのかを追求し『遠野物語』を著した高名な民俗学者です。この柳田がエスペラントに熱心に取り組みました。

その契機になった人物がグスタフ・ラムステットというフィンランド人です。彼はアルタイ語学者ですが、ロシア十月革命によってロシアから独立したフィンランドの最初の公使として日本に赴任しました。

ラムステットは民俗学者でもあり、またエスペランティストでした。彼は日本で多くのエスペランティストに歓迎され、各地で講演しましたが、英語ができないという彼は、すべての講演をエスペラントで行い、日本人のエスペランティストが通訳しました。

柳田は同じ民俗学の仲間であったラムステットと交流し、エスペラントを学ぶようになったのです。柳田は1922年、国際連盟の委任統治委員会日本代表としてジュネーブに滞在していた時、国際連盟はエスペラントを公認の言語として採用すべく、新渡戸稲造らと働きかけました。

英語やフランスを母語としない国々の外交官にとってエスペラントはこの国の言葉でもなく、誰もが負い目を持つこともなく使え、言語の公平さ故に公用語にすべきと推進したのです。しかし結果は、フランス政府などの反対によって潰されました。実は近年でもEUでエスペラントを共通の言語にしようという動きがありました。英語やフランス語を使う場合、通訳や翻訳に費やされる費用と人の多さを考えると、国際共通語であるエスペラントの採用は大きな利益をもたらすからです。しかしこの時も、英語が国際共通語だと言い張るイギリスなどの反対によって潰されてしまいました。

フランスやイギリスは“大国”としての面子から、ど

日本のエスペランティストたち  
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ!」Ⅲ

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

うしても英語とフランス語を自国の国益のために、エスペラントを公用語にすることに常に反対するのです。

言語帝国主義という言葉があります。まさに英語帝国主義、フランス語帝国主義です。英語やフランス語を母語としない小国の人々は常に、彼らよりはうまく喋れず、負担を強いられるこのような言語状況がいいのかどうか、本気になって考える時期ではないでしょうか。

### ▶宮沢賢治もエスペラントを学ぶ

もう一人、ラムステットの講演によってエスペラントに目覚めたユニークな日本人が宮沢賢治です。『風の又三郎』『注文の多い料理店』『銀河鉄道の夜』などの作品によって、今でも多くの人々に愛されている宮沢賢治は東京でラムステットの講演を聞きました。

ラムステットはアルタイ語、モンゴル語、朝鮮語などを研究しながら、日本に10年間滞在し、エスペラントの普及にも貢献しました。そして講演の中で「やっぱり著述はエスペラントによるのが一番だ」と語るのを聞いた賢治はいたく感心し、さっそくエスペラントを学んだといいます。賢治の架空の理想郷に、故郷の岩手をモチーフとした「イーハトーヴォ」という言葉がありますが、近年の研究によれば、イーハトとは、岩手(イワテ)をエスペラント式にしたものだと言われています。

彼の全集を繙けば、エスペラントについて書かれたものを見ることができます。賢治を尊敬している作家・井上ひさしが、エスペラントに並々ならぬ関心を持ち学習したという説もありますが、けだし当然といえるでしょう。

### ▶大杉栄は中国にも影響を与えた

このような異色のエスペランティストがいる一方、エスペラントは多くの社会主義者らに影響を与えました。その運動の先頭を走った堺利彦が「平民新聞」廃刊後に出した「直言」という新聞にエスペラントを紹介しました。この堺の発信が社会主義者らの知識人に大きな影響を与え、山川均、高島素之、片山潜、吉野作造らがエスペラントを学びました。その中の一人にアナーキスト(無政府主義者)の大杉栄がいます。

大杉栄といえばアナーキスト、アナーキストといえば大杉栄と言われるほど、この世界では有名な男です。残念ながら大杉は関東大震災直後、憲兵隊によって妻の伊藤野枝と甥と一緒に虐殺されました。一般的に、下手人は甘粕正彦と言われますが真相は、甘粕は直接

手は下さず、憲兵隊の罪を背負ったと思われます。この点については本誌2012年5月号に「甘粕正彦と大杉栄」という文章を書きましたので見ていただければと思います。

大杉は何度も獄中に入りましたが、その都度、外国語をマスターしたと言われていています。『自叙伝・日本脱出記』にはこんな文章があります。「元来僕は一犯一語という原則をたてていた。それは一犯ごとに一外国語をやるという意味だ。最初の未決監の時にはエスペラントをやった。つぎの巢鴨ではイタリア語をやった。二度目の巢鴨ではドイツ語をちっと噛った。こんども未決の時からドイツ語の続きをやっている」と書き、ロシア語、スペイン語も学習したようです。大杉は東京外大フランス語科を出たこともあり、語学好きだったのでしょう。

大杉は時の政府に対する社会的な闘いに先頭を切って活動する一方、〈フリーラブ〉と言い、自由恋愛論者として〈女性活動〉!にも活発でした。

堀保子、伊藤野枝、神近市子ら先進的な女性たちと恋愛をして、時に三角関係、四角関係にまで発展し、葉山の日蔭茶屋では、女性と一緒にいたところを神近市子に襲われ刺されるという事件にまでなりました。

戦後、神近は社会党代議士として活躍します。時にテレビに映る神近の姿を見ては、若かりし頃は、こんな情熱があったのだと感慨にふけりました。この日蔭茶屋事件は当時の新聞などを賑わしましたが今なら連日、テレビや週刊誌で話題を独占していたことでしょう。

1960年代に学生時代を過ごした私は大杉栄に魅かれましたが、近年また、〈日本で最も自由だった男〉として再び脚光を浴びています。大杉は〈自由恋愛〉というだけでなく、日本を秘かに脱出して上海やフランスに行き海外のアナーキストと交流するなど、その自由な生き方が、何かしらせせこましくなっている現代日本に対する批判的な視点を提供しているかもしれません。近年、小説の主人公として描かれたり、ユニークな刊行物で大杉栄が特集されています。閉塞した日本に対するアンチテーゼのようなメッセージを大杉は持っていると言えるでしょう。そして実は、大杉は中国のエスペラント活動にも積極的に寄与しているのです。

(続く)

※参考文献は最終回に列記します